

---

# 神様のおもちゃ箱

仁科治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様のおもちや箱

### 【Nコード】

N1092L

### 【作者名】

仁科治

### 【あらすじ】

「才前二、コノ世界ノ秘密ヲ教工テヤロウカ。ドウシテ、俺タチミタイナモノガ生キテイルノカ、才前二八不思議ダロウ。俺タチモ、コナ姿デ生キテイルコトヲ好イト八思ツテイナイ。シカシ、便利ナンダヨ。」

## 5 無言の電話の後で…

### 5 無言の電話の後で…

この一年近く、妻とウォーキングを始めた。会話が増えた。それに、下腹のふくらみが減り、脇腹がしまってきた。脂肪が確実に減る感じがして、よほどの大雨でないかぎり時間を見ては続けている道で出会う夫婦が多いのも励みになった。

その日、小雨が降っていた。

コンクリートで足を取られないように速度を落としながら歩いた。下り道で滑りそうになった。足元を見ると、白いぬめった筋が引いていた。どうやら、その上を踏んだらしい。

この日はジーンズをはいていた。たまたま、ウォーキング用の運動着を洗ったばかりだった。

家に帰って、ジーンズを三つ折りにたたみ、椅子の上に乗せた。置き方が悪かったのか、カーペットに落ちた。拾い上げると、ジーンズの裾から腿のあたりまでぬるりとした白い光が広がっていた。跳ね上がって汚れたのだろうと思って明かりにかざした。

長い草がついていた。

指でつまんだ。皮膚にしめった感じがした。指を離したところが膨らんで、全体が短くなった。生きていた。ボールペンでジーンズからはがすと、細くなって垂れ下がった。伸ばせば一メートルは超すようだった。

どうしてよいか思い当たらないまま、洗面台に置いた。

白い陶器の上で、それは縮まっていき、先端部分が持ち上がった。頭なのだろう、T字になった。

T字の重なりどころが開いたように思った。歯がのぞいたような気がした。

「才前二、コノ世界ノ秘密ヲ教エテヤロウカ。ドウシテ、俺タチ

ミタイナモノガ生キテイルノカ、才前二八不思議ダロウ。俺タチモ、コナ姿デ生キテイルコトヲ好イト八思ツテイナイ。シカシ、便利ナンドヨ。通りカカル生キ物二飛ビカカル。口ヤ手ノ届カナイトコロニ張りツケレバ、モウ天国ナノサ。ソノ生キ物ノ体液ヲイツマデモ吸ツテ、ソイツガ倒レタ後モ、俺タチ八生キテイケル」

ヒルは、そう言つて丸まった。

私は厚手の広告紙で包み込み、その上から何枚かの広告紙を覆い、ゆっくりと力を込めた。指先に痒い感じがした。ぬめっていた。洗剤で何度も洗った。なかなか取れない。

気になって、ジーンズが落ちた椅子の下あたりをみた。あいつの子どものような小さい生き物がT字の頭をもたげていた。

「俺タチ八便利ダロウ。ドンナ姿デモ生キテイケル。イツマデモ吸イツイテイテヤル。才前ガ俺タチトノ約束ヲ忘レナイヨウニナ」

その夜、電話で起こされた。

二時を回っていた。受話器から声は聞こえてこなかった。しかし、向こう側で息を潜めている気配がしていた。

電話を切ると、一〇分後にまたかかってきた。無言。こちらが何かを言い出すのを待っているようだった。その後、電話は鳴らなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1092/>

---

神様のおもちゃ箱

2010年10月22日00時16分発行